

病害虫発生予察情報（1月予報）

平成29年12月27日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
イチゴ	うどんこ病	発生量：やや多 (発病株率 1.0%)	12月中下旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：低い(±)
	灰色かび病	発生量：やや多 (発病株率 0.5%)	12月中下旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：低い(±)
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率 1.6%)	12月中下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：低い(-)
	ハダニ類	発生量：並 (寄生株率 14.1%)	12月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：低い(-)
	アザミウマ類	発生量：少 (寄生株率 2.1%)	12月中下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：低い(-)
トマト	葉かび病 すすかび病	発生量：少 (発病株率 17.4%)	12月中下旬発生量：並(±) 但し、一部ほ場で多(+) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(-)
	灰色かび病	発生量：並 (発病株率 3.8%)	12月中下旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(-)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：並 (発病株率 2.7%) タバココナジラミ発生量：少 (寄生株率 3.2%)	12月中下旬発生量 黄化葉巻病：並(±) 但し、一部ほ場で多(+) コナジラミ類：少(-) 気象予報：気温：低い(-)
	ハモグリバエ類	発生量：やや多 (寄生株率 1.1%)	12月中下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：低い(-)
タマネギ	灰色腐敗病	発生量：少 (発病株率 0.04%)	12月下旬発生量：並(発生なし)(-) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(-)
	腐敗病	発生量：少 (発病株率 2.9%)	12月下旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：低い(-) 降水量：並～少ない(-)

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
タマネギ	ネギアザミウマ	発生量：少 (寄生株率 44.0%)	12月下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～少ない(±)
レタス (非結球レタ スを除く)	べと病	発生量：少 (発病株率 1.8%)	12月中旬発生量： 少(発生なし)(－) 気象予報：気温：低い(±) 降水量：並～少ない(－)
	斑点細菌病	発生量：少 (発病株率 2.3%)	12月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～少ない(－)
ダイコン	白さび病	発生量：並 (発病株率 4.1%)	12月上旬発生量：並(±) 気象予報：気温：低い(±) 降水量：並～少ない(－)
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：並 (発病株率 1.8%) アブラムシ類発生量：少 (寄生株率 12.0%)	12月上旬発生量 モザイク病：並(±) アブラムシ類：少(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～少ない(＋)
	コナガ	発生量：並 (寄生株率 0.3%)	12月上旬発生量：並(±) フェロントラップ誘殺数：やや少(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～少ない(＋)
	ナモグリバエ	発生量：少 (寄生株率：31.7%)	12月上旬発生量：少(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～少ない(＋)
キャベツ	菌核病	発生量：少 (1月平年値なし)	12月下旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～少ない(－)
ネギ (シロネギ)	さび病	発生量：少 (1月平年値なし)	12月下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～少ない(－)
	べと病	発生量：並 (1月平年値なし)	12月下旬発生量：多い(＋) 気象予報：気温：低い(－) 降水量：並～少ない(－)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年（静岡県過去の10年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県過去の10年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2 予報の根拠と防除対策

【イチゴ】

<生育の概況>

第一果房は収穫中～収穫終わりで、第二花房は出蕾始め～開花中である。生育は平年並～遅い。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 12月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は3.3%（平年1.8%）と平年よりもやや多い発生であった。一部で発生の多いほ場がみられた。
- ・ 本病は気温が20℃前後のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平年よりも低い、ハウス内の気温は本病の発生には適する。

防除対策

- ・ 株の過繁茂は発生を助長させるため、不要な下葉は除去する。
- ・ 初期発生に注意し、発病が少しでもみられるほ場では早急に防除を行う。
- ・ 今後は果実での発生も多くなるので、発病した果実は速やかに取り除く。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 12月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.3%（平年0.1%）と平年よりもやや多い発生であった。
- ・ 本病は気温が20℃前後で、多湿条件のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平年よりも低い、ハウス内は多湿になりやすく、ハウス内の気温も本病の発生には適する。

防除対策

- ・ 天窓、側窓の開閉、かん水に十分注意し、ハウス内が多湿にならないようにする。
- ・ 枯葉、老化葉及び不要の果梗枝は速やかに取り除く。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 12月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.1%（平年1.3%）で平年よりも多い発生であった。これは一部ほ場で多発したためである。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低いため、本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ 今後外からの侵入は少なくなるが、アブラムシ類の発生に注意し初期防除に努める。
- ・ 天敵を利用する場合は、寄生されたアブラムシ（マミー）の発生状況をよく観察する。
- ・ アブラムシ類が多発した場合は天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ、アブラバチ）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 12月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率18.4%（平年15.5%）で平年並の発生であった。ハダニ類の発生は地域やほ場により異なり、多発生ほ場もあった。天敵を放飼しているほ場では、天敵が観察された。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低く、本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ ハダニ類の寄生が認められた場合は、少発生うちに防除する。なお、ハダニの発生している株が点在している場合は、発生株周辺にスポット散布するなど、迅速に対応する（農薬の総使用回数に注意する）。
- ・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、物理的に作用する剤や天敵を利用する。また物理的防除剤は卵への効果が低く、残効性が期待出来ないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・ 天敵を利用し、追加放飼をする場合は、ハダニ類、天敵の発生状況をよく観察する。
- ・ ハダニ類が多発した場合は、天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ、アブラバチ）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・ 12月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率0.7%（平年1.9%）で、平年より少ない発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低く、本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ 最近アザミウマ類の発生・被害が多く、アザミウマ類が好む花での発生をよく観察する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・ 例年多発生ほ場では、開花初期の防除を徹底する。
- ・ 天敵を利用している場合は、天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ、アブラバチ）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅れている。

●葉かび病、すすかび病

予報の根拠

- ・ 12月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は3.2%（平年19.7%）と平年より少ない発生であった。
- ・ 本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生をあまり助長しない。
- ・ 例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加する。

防除対策

- 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- 多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- 12月以降は葉かび病が優占する傾向がある。

●灰色かび病

予報の根拠

- 12月中下旬の巡回調査では、一部ほ場で多発したため平均発病株率は4.0%（平年3.2%）と平年よりやや多い結果となったが、その他のほ場では平年並であった。
- 本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生をあまり助長しない。
- 例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加する。

防除対策

- 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- 朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- 12月中下旬の巡回調査では、一部ほ場で多発したため平均発病株率は5.1%（平年4.0%）と平年よりやや多い結果となったが、その他のほ場では平年並であった。
- コナジラミ類は、平均寄生株率1.8%（平年5.4%）と平年より少なかった。1か月予報では、気温は平年より低いため、媒介虫タバココナジラミの増殖を助長しない。

防除対策

- 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなどして適切に処分する。
- 脇芽や摘果などの残さは放置すると野生生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- タバココナジラミ成虫の新芽への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- 収穫残さは本病の伝染源となるため、栽培終了後は植物体を完全に枯死させてから施設外へ持ち出す。

●ハモグリバエ類

予報の根拠

- ・ 12月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は4.3%（平年1.8%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低いため、本種の増殖を助長しない。

防除対策

- ・ 葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕に注意し、発生が認められる場合は薬剤防除を実施する。本種は幼虫期間が数日から1週間程度と短いため、初期の絵描き症状を見つけ次第、薬剤防除を実施する。

【タマネギ】

<生育の概況>

生育は平年より約1週間遅れている。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・ 12月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・ 本病は多雨で発生が助長されるが、1か月予報によれば降水量は平年並～少ないため、本病の発生は助長されない。

防除対策

- ・ 春期収穫の作型では、過剰な施肥や肥料の遅効は本病の発生を助長するため、適切な施肥管理に努める。
- ・ 葉身に白斑や葉先枯れが見られるほ場や例年発生が見られるほ場は、鱗茎への感染を予防するため、薬剤による防除を実施する。複数回散布する場合は、系統の異なる薬剤を選択する。
- ・ 罹病球やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して適切に処分する。

●腐敗病

予報の根拠

- ・ 12月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・ 病原細菌の生育適温は20～23℃で、強風雨や多湿な環境により発生が助長される。1か月予報では、気温が低く降水量も平年並～少ないため、本病の発生は助長されない。

防除対策

- ・ 本病に対する防除は、定期的な薬剤散布よりも、感染の機会が生じる前後をねらった防除の効果が高い。このため、気象情報に注意し、強風雨の前後に薬剤散布を行う。
- ・ 発生が確認されたほ場では被害株を抜き取り、今後の感染防止を図る。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 12月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は11.6%（平年42.9%）と、平年に比べ少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長しない。

防除対策

- ・ 1月は特に防除の必要はない。例年、2月後半に気温が高くなると増殖を始め、生息密度が高まるので、発生状況に応じて薬剤防除を実施する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育は平年より遅れている。

●べと病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年発病株率1.6%）
- ・ 病原菌の生育適温10～15℃で、多湿を好む。1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生をあまり助長しない。
- ・ トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなるので注意する。

防除対策

- ・ 初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率0.4%（平年1.3%）と平年より少ない発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より低く、降水量は平年並～少ないため、本病の発生をあまり助長しない。
- ・ トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなるので注意する。

防除対策

- ・ 発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げるのが大切である。
- ・ 降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、トンネル内が高温多湿にならないよう換気に努める。

<その他の病害虫>

●菌核病

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率0.3%（平年0.1%）と、平年より発生が多かった。
- ・ 発病後の薬剤散布では効果が劣るため、常発地では定植後30～40日で、本葉が8～10枚程度出葉した頃を目安として予防散布を行う。
- ・ 発病株には菌核が形成されて伝染源となるので、ほ場に放置しない。

【ダイコン】

<生育の概況>

生育は平年よりやや遅い～遅い状況である。

●白さび病

予報の根拠

- ・ 12月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は9.4%（平成8.8%）と平成並の発生であった。
- ・ 本病は多湿を好み、分生子の発芽最適温度は10℃程度である。1か月予報では、気温は平成より低く、降水量は平成並～少ないため、発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・ 白さび病が多発するとワッカ症を併発することがあるため、は種時期の遅い作型では、葉での発病が少ないうちに予防散布を行うことが必要である（予防散布の防除適期は間引き後7～30日）。
- ・ 発病残渣は翌年の伝染源となるため、ほ場に放置しない。
- ・ 排水を良好にするなどして多湿にならないように努める。

●モザイク病（アブラムシ類）

予報の根拠

- ・ 12月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.2%（平成1.4%）と平成並であった。
- ・ 本病の媒介虫アブラムシ類は、平均寄生株率1.2%（平成8.1%）と平成より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平成並～少ないが、気温は平成より低いため、アブラムシ類の増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・ 雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・ 被害株も伝染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外で土中深く埋めるなどして適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・ 12月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.1%（平成1.1%）と平成並であった。
- ・ 浜松市および牧之原市のフェロモントラップによる誘殺数は、平成よりやや少なく推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量は平成並～少ないが、気温は平成より低いため、本種の増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・ 発生が平成並～少ないほ場では防除は必要ない。発生が多い場合は、薬剤が葉裏にかかるように薬剤を散布する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・ 12月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は11.1%（平成28.4%）と平成より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平成並～少ないが、気温は平成より低いため、本種の増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・ 上位葉に白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

【キャベツ】

<生育の概況>

収穫は平年より早い地域、遅い地域があり、地域で異なっている。

●菌核病

予報の根拠

- ・ 12月下旬の巡回調査では、発病は見られなかった（平年0.1%）。但し、病害虫防除員からの報告では、平年よりもやや多くなっている地域がある。

防除対策

- ・ 収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、1月下旬以降に収穫予定のほ場では注意が必要である。
- ・ 薬剤防除は予防散布や発生初期の散布の効果が高いため、予防散布を行う。複数回散布する場合は、系統の異なる剤を選択する。

【ネギ（シロネギ）】

<生育の概況>

収穫は平年並～遅れている。

●さび病

予報の根拠

- ・ 12月下旬の巡回調査では、平均発病株率2.4%（平年3.5%）と平年より少なかった。
- ・ 本病は、気温10～22℃の時期に降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、気温が低く降水量も平年並～少ないため、本病の発生は助長されない。

防除対策

- ・ 収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、1月下旬以降に収穫予定のほ場では注意が必要である。
- ・ 薬剤防除は予防散布や発生初期の散布の効果が高いため、予防散布を行う。複数回散布する場合は、系統の異なる剤を選択する。

●べと病

予報の根拠

- ・ 12月下旬の巡回調査では、平均発病株率は1.8%（平年0.3%）と平年よりやや多かった。
- ・ 気温15～20℃で降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、気温が低く降水量も平年並～少ないため、本病の発生は助長されない。

防除対策

- ・ 収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、1月下旬以降に収穫予定のほ場では注意が必要である。
- ・ 薬剤散布は予防散布や発生初期の散布の効果が高いため、予防散布を中心に実施する。

3 季節予報

(1) 1 か月予報 (東海地方 平成 29 年 12 月 21 日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 12 月 23 日から 1 月 22 日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べ晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年に比べ曇りや雪の日が多いでしょう。向こう 1 か月の降水量は、平年並または少ない確率ともに 40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに 40%です。週別の気温は、1 週目は、平年並の確率 50%です。2 週目は、平年並の確率 50%です。3～4 週目は、平年並または低い確率ともに 40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1 か月	気温	40	30	30
1 か月	降水量	40	40	20
1 か月	日照時間	20	40	40
1 週目	気温	30	50	20
2 週目	気温	30	50	20
3～4 週目	気温	40	40	20

【予報の対象期間】

1 か月 : 12 月 23 日 (土) ～ 1 月 22 日 (月)
1 週目 : 12 月 23 日 (土) ～ 12 月 29 日 (金)
2 週目 : 12 月 30 日 (土) ～ 1 月 5 日 (金)
3～4 週目 : 1 月 6 日 (土) ～ 1 月 19 日 (金)

(2) 3か月予報 (東海地方 平成29年12月25日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 1月から3月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

- 1月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。
- 2月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。
- 3月 天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。

【気温】

3か月			1月			2月			3月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
30	40	30	40	40	30	30	40	30	30	40	30

【降水量】

3か月			1月			2月			3月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
40	40	20	40	30	30	40	30	30	40	30	30

【参考資料】

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	1月	2月	3月	1月	2月	3月
浜松	5.9	6.5	9.7	57.0	78.3	149.4
静岡	6.7	7.3	10.3	75.0	102.6	216.8
三島	5.7	6.3	9.5	74.4	88.3	164.4

*1981年～2010年の平均 *降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--